

伝統文化の源流に触れる

開催日：2019年 3月17日(日)

■12:30～開場 ■13:00～開演 ■15:30終了予定 ■会場：国立文楽劇場・小ホール

「Nobody grows old merely by a number of years. We grow old by deserting our ideals.」

Samuel Ullman 「Youth」原詩より抜粋

「年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。」

サミュエル・ウルマン「青春」(「Youth」) 岡田義夫訳より抜粋

＜第1部＞ 紙づくり、森づくり ～蛭谷和紙～ 講師／川原 隆邦氏



「洋紙」が日常的に使われる昨今。「和紙」はすっかり特別なものになってしまいました。その昔、どこの集落にでも紙を漉く工房があり、誰もが日用品として使っていたのが和紙でした。今では各地に点在する紙漉き職人の手による和紙は、工芸となり芸術となり、貴重な存在になってしまいました。越中富山にもその伝統は「越中和紙」として脈々と生き続け、その中から四百年前より富山県朝日町に続く「蛭谷和紙」の唯一の継承者である職人をご紹介します。その「和紙」の風情や意味合いに触れていただきます。

川原製作所 代表 川原 隆邦 氏

1981年生まれ。22歳の時、「蛭谷和紙」唯一の承継者である伝統工芸師 米丘寅吉氏に師事。和紙の原料である楮(こうぞ)やトロアオイを育成するところから紙を漉くまでを、一貫して実践する方法で和紙を作る。2006年に富山県の伝統的工芸品コンクールで銀賞を受賞したことを皮切りに、その後数々の賞を受賞しつつ、富山県を中心に個展や美術、芸術の国内外の博覧会等へ作品を出展。直近では、フランスのバリ装飾美術館で開催されている「ジャポニズムの150年」展に参加出展している。イタリアのフィレンツェ市長に和紙の市章を献上、ディズニーの「Japan Classics シリーズ」を製作、日本三霊山の一つである「立山」に由来する立山町芦峯地区の手刷りの護符を復元させるなど、幅広い創作活動をするとともに、その活動ぶりは2014年頃よりテレビや雑誌等マスメディアにも数多く取り上げられている。現在は、2015年に移り住んだ富山県立山町の工房で、「よく考えて丁寧に創造する」の精神のもと受注による和紙の製作を行っている。



＜第2部＞ 和太鼓の効用 講師／東 宗謙氏



日本では、縄文時代の合図などの様々な用途に使用されていたものが太鼓の始まりと言われていています。奈良時代には雅楽の原型が大陸から伝わりました。

その際に音楽の拍子を取る楽器として太鼓が使われており、その後「能楽」や「歌舞伎」においても重要な役割を果たしてきました。太鼓は伴奏楽器として神事、催事、伝統芸能には欠かせない物として今日まで伝承されてきました。

その一方で「太鼓は人を心身ともに元気にする」というすごい力を秘めた楽器として認知されています。太鼓の歴史やその効用のお話を伺い、和太鼓の演奏をお聴きいただきます。

NPO法人和太鼓文化研究会 理事 東 宗謙 氏
(株式会社太鼓センター 代表取締役)

1949年生まれ。大学時代に合唱団で太鼓と出会い、卒業時に音楽の道へ進む決意をする。1987年に関西初の和太鼓プロ集団「祭樂(まつりしゅう)」を結成し初代の座長となり、小・中学校での演奏公演を精力的に展開する。1988年に株式会社太鼓センターを設立し、和太鼓の製造販売を手がけるかわら、和太鼓を教えることにも尽力する。東京の浅草に和太鼓教室である「TAIKO-LAB」を開設したのを皮切りに、その後全国24拠点到に会員数5000名を超える和太鼓教室を展開し、その数も40箇所以上に及んでいる。



- 会場／国立文楽劇場小ホール(大阪市中央区日本橋1-12-10)
最寄駅：堺筋線・千日前線「日本橋」駅下車 7番出口より徒歩1分
- 参加無料
事前にハガキもしくはメールに住所・氏名・電話番号をご記入の上、下記までお申し込みください。
- 主催・連絡先／一般社団法人老人文化会議
(〒550-0006大阪市西区江之子島1-7-3)
TEL:06-6444-2777 E-mail:info@eldernets.or.jp